

ンタクト〕が生じる場となり、アラビア語によって保存・発展せられた（「ヨーロッパの（起源）」とされる）古代ギリシャ発祥の諸学——といっても、そのほとんどがイオニア植民地（現在のトルコ）という「コンタクト・ゾーン」に（始まり）を有するのですが——をラテン語に移す「翻訳センター」が営まれることになりました。そこは、異教徒にも寛容なイスラームの知識人たち、必死にアラビア語を学ぶ進取の気性に富んだキリスト教の学徒たち（今日でいえば「グローバル人材」でしょうか？）、そして、就中ユダヤ教徒ほかの故国喪失者（*exile*）たちが、ところせましと活躍していた——まさに「コンタクト・ゾーン」そのものだったのです。

（同志社大学准教授）

ヨーロッパの多言語的アプローチ 複数言語のはざまから日本と宗教学を考える

エリザベッタ・ポルク

私はマルチリンガルな環境で育った研究者です。大学教育はイタリアで受け、イギリス、スペインで勉強を継続し、ドイツ、インドに留学し、ドイツのマールブルク大学で宗教学（日本宗教）の博士号を取得しました。その間、イタリア語、ドイツ語、英語の教員国家資格を取

り、イタリヤ、オーストリア、ドイツで語学の講師をしながら、国際的アプローチや異文化交流を学びました。そしてその後、日本、ドイツ、ハワイの大学教員として、日本宗教とその社会的・文化的意義に関する講義を受けもってきました。

研究者としては、国際宗教学宗教学史学会（IAHR）の綱領に基づく宗教学（ドイツ語：Religionswissenschaft、英語：Religious Studies、あるいは the Academic Study of Religions、イタリア語：Storia delle religioni）の視点から、いろいろな宗教現象を分析しています。IAHRの研究者は、方法論はそれぞれ違いますが、「IAHRは特定の主義、信条、宗教を奨励するためのフォーラムではない」という原則は共有しています。私は、宗教学は特定の宗教の振興のためにあるのではなく、一つの学問分野として、どの宗教現象の分析や説明も、反証に対して常にオープンでなければならないというIAHRの方針に則りながら研究及び教育を行ってきました。つまり、宗教現象を、いかなる偏向をも排して、歴史的、経験的データとして分析し、社会科学の方法論を適用するなど、学際的に考察していこうとするアプローチをとってきたのです。

これまで私は、主に現代社会における日本の宗教、特に仏教と日本の文化・社会の関係、宗教的表象、日本の宗教とメディア、そして世俗社会・共同体との関係に研究の焦点をあててきました。また宗教と文明・文化の関係をよりよく理解するために、欧米と日本で宗教がどのようにに表象され受容されているかについての比較研究にも重点的に取り組んできました。

教育においても、私は、こうした学問的客観性と、社会・文化との関連を通じて検証していく方法論を重視し、宗教学の最新の分析ツールを紹介したり、比較という視点を導入しながら、様々な宗教、及び宗教現象を分析し説明しています。さらに、宗教とメディア、宗教と現

代社会・政治・経済・文化の関係、ジェンダー、ポスト・コロニアリズム、グローバル化、世俗化といった今日的イシューとの関わりについての説明や議論も必要だと考えています。学生たちに、人文学と宗教学を、今の具体的な文脈の中で、現実に即しながら学んでもらいたいというのがその趣旨です。

学生の関心をかき立て、授業で扱うテーマと社会的・文化的現実を関連づけるために、視聴覚資料を積極的に使用しています。宗教学の研究でもフィールドワークは大切だと思っていますので、その方法的なツールも学生たちに提供しています。また外国語学習の重要性も強調しています。外国語ができるようになると、視野が広がり、他文化の理解を深めることができますし、また自分の将来の研究や職業上の可能性を高めてくれます。

世界の各地で戦争が起こり、ともすると宗教についての偏見が持たれやすくなっています。が、そうした状況の中で、宗教学者は、様々な宗教的伝統についての公正で正確な情報を提供するという重要な任務を担っていると思います。冒頭に述べたように、私は長年にわたり国際的アプローチや異文化交流の経験を積んできましたので、それらを活かし、学生たちが、宗教的伝統についてのステレオタイプに囚われることなく、真実な理解にたどりつくよう促しています。教育においても研究においても、こうした努力を今後とも続けていくつもりです。

日本学をマルチリンガルの視点から研究、教育することは、知的刺激に富む豊かな経験をもたらしてくれます。別に日本学や宗教学に限りません。マルチリンガルの視点というのは、他の地域研究、他の学問分野にも応用できるものだと思います。ステレオタイプにはまり込んでしまったり、平板な西洋（ヨーロッパ）中心主義に陥ったりしなくて済むようになるのもその功徳の一つでしょう。

言うまでもありませんが、日本に関連したテーマを扱う研究者は、日本語をよく知っていることが大切です。特に日本研究を志す人は、日本語研究を二次の問題と考えるべきではないと思います。日本人研究者とコミュニケーションを交わし、創造的な意見交換ができるようになれば、相互理解を増進させ、研究の水準を高めていくことができます。

このことは地域研究一般にも敷衍できるでしょう。地域研究において当該地域の言語を知らないまま二次的（大半が英語の）資料にのみ依存するのは、研究を大きく制限されたものにしてしまいかねません。研究対象の地域の研究者や住民とのコミュニケーションができなくてはバランスのとれた研究にはなりませんし、悪くすると、社会現象の解釈を誤ってしまい、とんでもない誤解に導かれるおそれさえあります。

特に（旧）植民地について研究する際には、霸権的な（宗主国の）文化圏の言語だけで研究を行うことには大きな問題があります。研究が一方的な見方に陥る危険性が高く、現にそれは今日でもあちこちで目につく弊風です。こうした不正さはただ学問分野に留まりません。支配的な文化が、自分たちの見方を他文化に押しつけてくるのは、経済的・政治的国際関係にも見られ、現在の南北格差、中心と周縁の格差は歴然としています。私自身、「南」に属する周縁の地のサルデーニャ島で生まれ育った人間であるため、権力と富からの疎外、文化的な押しつけとアイデンティティの悩みといった問題に特に敏感なのかもしれません。

しかし一方で、「島」育ちにはいい面もあります。他文化を理解しようとする際に、支配的なアプローチにばかり依存することを警戒し、現地の言語を習い、現地の観点から文化を知ろうとする動機に親しいということです。私が日本研究を始めたときにもそうした動機が働きました。私は当時の日本研究の中に、オリエンタリズムやオクシデンタリズムという還元主義

的、本質主義的な方法論が支配的であることを感知し、それが日本文化や日本の宗教に対して歪んだ解釈を生んでいるという印象を持ちました。たとえば、仏教が西洋（欧米）に伝えられるときに、重要な仏教の宗派、特に浄土真宗が不当に矮小化されてきたことなどその一例です。

日本研究を重ねていくにつれ、私の関心は広がっていき、今は日本の地域社会における宗教と世俗の問題、日本の宗教とポピュラー・カルチャーの関連といったテーマを中心に研究を行っています。しかし私の研究方法は以前と変わりません。日本語の一次資料にあたること、フィールドワークを欠かさないこと、そして多言語の参考文献を参照することを励行しています。私はこうした多文化的、多言語的な研究方法を含む、多様な視点から物事を見て考えるところという姿勢は、学問の世界の内外を問わず、私たちをよい方向に向けてくれる力になると強く信じています。地球規模での交流が急速に活発化し、地域間の境界線が統合されたり、曖昧になったり、消失しつつある現在の世界にあって、それは日本研究ばかりでなく、世界をよりよく理解するための大きな力となってくれはるはずで

（国際日本文化研究センター外国人研究員）